

聖書:ローマ人への手紙8章22~30節

説教:からだが贖われることを待ち望む

## 1 よみがえられたイエスに出会ったパウロ

今朝は、主の復活をお祝いするイースターに合わせて、先に天に召された方々のことを覚える召天者記念礼拝を迎えております。

パウロは、第一コリント15章19節で、「もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です」と語っています。その理由については、続く20、21節に書かれています。

「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。死が一人の人を通して来たのですから、死者の復活も一人の人を通して来るのです。」

これを書いたパウロはパリサイ派と呼ばれる宗教グループの若きリーダーで、かつては熱心にクリスチャンを迫害していた人です。そんなパウロが今やクリスチャンとなり、伝道師になったのは、ご存じのようにダマスコに出かける途中で起きた一つの事件があったからでした。さあ今日もクリスチャンを迫害するぞと意気込んで道を歩いていたら、急にまぶしい光を受けて地面にぼったりと倒れてしまう。気がつくと目が見えません。何が起きたのかと混乱しているときに、声が聞こえてきた。

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」「主よ、あなたはどなたですか」と問うと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」との答え。これを聞いて彼は腰を抜かします。イエスは十字架で死んだはずではなかったのか。でもいま、その方の声を確かにこの耳で聞いた。イエスと呼ばれる方が本当に死からよみがえられたのだ。このような経験を彼はしてきた。だから彼は誰が何を言おうとも、「今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」と堂々と言えるわけです。

## 2 うめいている私たち

### 1) 信仰があれば?

それで私たちもあるときこの聖書のみことばに出会って、主のよみがえりを信じてクリスチャンになりました。それはよいのですが、ここで一つ困ったことが起きる。クリスチャンになったからと言って、いま目の前にある問題が消えてなくなるわけではありません。「クリスチャンは信仰があるから、何も悩まないんでしょ?」と言われる方

がいますが、とんでもない。悩みが次から次へと襲って来て、私たちは悩みの種類はそれぞれ違うかも知れませんが苦しんでいます。いや、苦しんでいるのは人間だけではない。22節。「私たちは知っています。被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき、ともに産みの苦しみをしています。」人間だけでなく自然界のすべての動物も植物もありとあらゆるものが苦しんでいる。

いままさに新型コロナウイルスのことで世界中が大変な騒ぎになっています。世界が造られた最初の時からそのようなものがあったわけではない。人が罪を犯した結果、このようなものが自然界に入り込んでしまいました。皆さん今感じていらっしゃると思いますが、自分がほかの人に感染させてしまったのではないかと。そういう不安があります。また、自分の働いている会社がつぶれるのではないかと。仕事を失ったらどうしようか。そういう経済的な不安もある。人間だけではない。動物園のトラやペットもコロナに感染する。まさに「ともにうめいている」という状態です。

信仰者なのだからこういうときこそ、あわてないで主を信じて落ち着いて行動しましょう、と言う人がいますが、それができたら誰も苦労しない。落ち着けと言われても心は騒ぎます。外出を控えてくださいと言われて、家の中に閉じこもっているても、いったいつまで続くのかわからない。それを思うと気が滅入ってしまって体調を崩し、なかには過呼吸になったという方もいました。これは「うめき」です。いったいどうしたらよいのでしょうか。

### 2) うめく理由

こんなときよく「あなたの信仰が弱いからです」と言われたりしてきました。あるいは、「心を騒がすのは、祈りが足りないからです」と逆に叱られることさえありました。しかし祈ってみたら心の底から不安が消し飛んだ、という経験は少なくとも私はほとんどない。多分私の信仰が弱いためののかも知れませんが、もしそれで片付けられたのなら、結局、信仰は努力という話になってしまう。それはどこか間違っています。聖書になんて書いていますか。もう一度22節を読みます。「被造物のすべては、今に至るまで、ともにうめき(いています。)」人が苦しうめくのは当然のこと。そこから出発する。

そもそもどうしてうめくのか。それが次にある23節。「それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだが贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」

「私たちのからだを贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいている。」言い換えればこういうことです。私たちがいただいている今のからだは一度死んで滅びるけれど、やがて天の御国に迎えられるとき、この古いからだは贖われて、新しいからだをいただいてよみがえることになる。そのことを今私たちは待ち望んでいる。そういう時間の中で私たちは日々過ごしている。そうしますとそこで何が起きるか。新しいからだをいただくことはうれしいことですが、だからと言って今の古いからだはすぐに新しくなるわけではない。しばらくの間、この古いからだとつきあっていかなければならない。私も、年をとって頭が薄くなり、あちこちが衰えて去年までできたことがだんだんできなくなる。健康診断を受ければ、あちこちに黄色信号が灯ります。大腸ポリープを取ったら癌でしつとと言われてしまう。自分のことならまだ笑ってすませるかもしれませんが、愛する家族や友人が重い病気にかかった、死にかけている、ということになったらどうするか。まさに今私たちは、そのような恐怖の中に置かれています。コロナに感染して死ぬのではないか。そのようにして私たちはうめいている。すべては、救いの約束は既にいただいているのに、新しいからだはまだいただいていない。そのような中途半端な状態に置かれていますので、どうしてもうめいてしまう。

### 3 神の助け

#### 1) 忍耐して待ち望む

いったいどうしたらよいのでしょうか。24、25節。「私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか。私たちはまだ見ていないものを望んでいるのですから、忍耐して待ち望みます。」

これだけ読むと、結局なんやかんや言ってもやっぱり忍耐して待ち望むこと。歯を食いしばってがんばりなさい、と言われたようだがっかりするかも知れません。確かに25節で終わっていたのならそのとおりだったでしょう。でも続きがあります。

#### 2) 同じように御霊もうめく

26節。「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。」

聖書はなんとやっているか。あなた一人ががんばれ、とは書いていない。「同じように御霊も」とある。「同じように」、いったい何と同じなのか。22節に既に書いてある。被造物すべてがうめいている。私たち人間がうめいている。それと同じように御霊もうめいてくださっている。自分だけがうめいていたのではない。神である御霊も私と一緒にうめいてくださる。驚くべき事です。

#### 3) 栄光をお与えになります

でもただ一緒にうめいていますというのであれば、なんの望みもありません。御霊のうめきももっと積極的です。26節後半。「御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。」不安や恐れの中で苦しむ、私たちはそのことしか見えませんが、実はその苦しむとうめきがそのまま神へのとりなしに変えられていく。それが御霊の働きです、と書いてある。とりなしと言っていますが、いったい何をどうとりなすのか。そのことを最後に見ます。

30節。「神は、あらかじめ定めた人たちをさらに召し、召した人たちをさらに義と認め、義と認めた人たちにはさらに栄光をお与えになりました。」

いま私たちは苦しみの中でうめいています。うめくというと、どうしても否定的に思われがちです。でも聖書を見たらそうではない。うめきには非常に積極的な意味がある。というのは、私たちがうめくとき、御霊もいっしょにうめく。そのうめきを通して、やがてこの古いからだを贖われて、新しいからだに移され、神からの栄光を受けることができるように、御霊がとりなしてくださるから。

この教会ができて最初に天に召された故中本亀子姉のことを思い起こします。姉妹は、若いときにご主人と満州に住んでおられたそうです。ところが日本が戦争に敗れたことで満州から引き上げなければならなくなった。その途中でお子さんを亡くされるというつらい経験をされました。そのことについて詳しく伺うこと機会はなかったのですが、姉妹の心の内には小さな息子さんをなくしたことのうめきがずっとあったのだらうと思います。その姉妹がやがてイエスに出会ってクリスチャンとなり、信仰をなくしそうになっている方がいます

と、「大丈夫、いっしょに天国に行きましょう」  
と手を握りながら励ましておられました。

そのような信仰の大先輩たちの歩みのうちに、  
よみがえられた主イエス・キリストの導きと、御霊  
なる方の励ましがあつたことを覚えて御名をあが  
めます。